

No.12
vol.3 no.4
1999.3.6 発行

JMMA JAPAN MUSEUM MANAGEMENT ACADEMY 会報

日本ミュージアム・マネジメント学会

これまでの博物館 これからの博物館

日本ミュージアム・マネジメント学会理事

株式会社セゾン劇場 代表取締役社長

宇佐美 昭次

博物館に対する私の記憶は、そう心地よいものではない。とくに幼い、もしくは少年時代がそうだ。

同世代のだれしもがそうであるように、そこは = 博物館は、うす暗い魔界といったところで、巨大な恐竜の骨格がある、頭蓋骨がある、不気味な鳥の剥製、無表情な化石がある。社会科見学の夜などは、魑魅魍魎の夢にうなされた。私が特に臆病な少年だったのかも知れない。

埼玉県西部に入間市がある。人口15万人余、典型的な、大都市周辺都市である。5年前、この地に博物館が誕生した。日本でも有数の産地ということで、「お茶」が主テーマである。

明るい、すべてが明るい。総敷地面積4万5,000m²の中に、柔らかい色の本館、充分な駐車場、視野いっぱいに広がる芝生の広場、点景として茶室まで備えている。

これは、一つの比喩としての話である。暗うつと明朗、閉鎖と開放、静と動、孤立と同調一単にハードの上のしつらえの差だけでなく、イメージ、雰囲気、方向性において、過去と現在、未来の博物館のあり方を示している。

そこでは、すべてが行われてよい。もちろん、古層から発掘された優れた遺物、各時代の歴史的遺産の収蔵と研究は、博物館のもとも基本的な機能だ。

しかしほかに例え、「むかしのくらしと道具展」として、まちの古老が小中学生にわら草履の編み方を教える。水がめ、蠅とり器、囲炉裏がある。若い主婦が藍染めをおばあさんから教わる。秋の日、館外の庭から「魂の響 太鼓」の音、ふるさと道遊歩大会、優雅な野点。

昨今、「生涯教育」は国家的なテーマとなっている。多くの時間を残された高年齢者のライフスタイルに対する一つの回答だ。博物館も重要な役割を果たすべきであろう。しかし、それだけでは博物館とその活動は老いる。

広場ではおさな子が母と陽を浴びている。子どもたちは学習体験する、ハイビジョンで地域文化への旅、おとなは得意な分野でのボランティア。

教育、学習、エンターテイメント、出会いと集い、喜びと感動 — 博物館 = そこはもはや、あらゆる人々の「生涯センター」としか呼びようがない。そう機能し、市民から愛されたい。

C · O · N · T · E · N · T · S

■これまでの博物館 これまでの博物館／日本ミュージアム・マネジメント学会理事 (株)セゾン劇場 代表取締役社長 宇佐美昭次	1
■ミュージアム文化研究部会／部会長・沖吉和祐	2
■制度問題研究部会／幹事・小川義和	3
■理論構築研究部会／部会長・高安礼士	4
■事業戦略研究部会／幹事・斎藤恵理	6
■ソフトサービス研究部会／幹事・重盛恭一	8
■教育・コミュニケーション研究部会／部会長・倉本昌昭、幹事・弓場哲雄	9
■ミュージアムショップ研究部会／幹事・山下治子	11
■投稿ご自由 侃々諤々／会員からのメッセージ	12
■研究部会の開催予定一覧	16
■インフォメーション	16

ミュージアム文化研究部会

ミュージアム文化研究部会について

1. 研究の進め方

本研究部会に限らず学会全体として、実践的な調査研究を中心に進めているが、3年の積み重ねをもとに、理論化（普遍化）を試みる時期になっている。この理論化は、次の具体的なミュージアム活動へ向けてのモデル設計、実施へつながるもので、学会として取り組むべき重要な作業である。

理論化の過程として、失敗事例の集積は、余計な試行を避ける上で成功事例以上に貴重であり、また、活動評価のチェックリストの作成は、次の活動を確実に前進させる上で不可欠になる。こうした、研究の進め方についての検討が必要な時期かもしれない。関連する研究部会間の共同作業が必要になるのではないだろうか。

2. 3年間の実践研究例のその後

本研究部会では、①ミュージアムは、どのような文化を創造し発信できるか、②地域の文化創造、まちづくりにミュージアムはどのように係わるか（係われるか）を基本テーマに約10の事例を参考に研究協議を重ねてきた。

滋賀県立琵琶湖博物館は、「里山」という新しい文化を人々に提示し、集客面でもますますの推移を見せており、豊田町香りの博物館は、博物館への女性の意識づけに予想を上回る効果をあげた。「大学全部を博物館に」をキヤッチフレーズに、市民と文化の共有を目指す北海道大学のユニバーシティ・ミュージアムは、いよいよ具体化の段階に入った。その一方、当初の目標が必ずしも達成されていない博物館や、存続すら危うくなりかねないところも出てきている。

「設置者としての自治体や企業が、ミュージアム運営にしつかりした理念を持っているか=総合的な運営基盤が整えられているか?」、「ミュージアムを支える住民の理解が十分に得られているか=住民は自分たちのミュージアムとの意識を持っているか?」、「ミュージアムを取り巻くあらゆる資源が運営に活かされる状況にあるか=ミュージアムは、日々新たな活動を行えるような体制にあるか?」といったことを当てはめてみると、実践研究例の動向や今後の可能性が理解できるよう思う。

3. 来年度の調査研究の方向

ミュージアム・マネジメントを考えるとき、垂直的視点としてのプログラム化と、水平的視点としてのネットワーク化があるように思う。その接点として、現在最も分かりやすい（重要な）切り口が「生涯学習」と「情報化」ではないだろうか。来年度は、こうした仮説のもと、この2つの切り口から、ミュージアム文

化について検討を重ね、理論化に繋げていきたい。

(部会長・沖吉和祐／筑波技術短期大学)

次回研究部会：「生涯学習とミュージアム」

話題提供 文部省生涯学習局社会教育課長
大西珠枝氏（予定）

(4月下旬)

制度問題研究部会

第10回制度問題研究部会報告

日時：平成11年1月23日（土）午後2時～5時
 会場：国立科学博物館 大会議室
 講師：原 真麻子氏
 （東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員）
 演題：博物館登録手続きの実際－東京都の場合－
 参加者：24名

制度問題研究部会としては本年度は国内の博物館制度について考察することになっているが、前回の研究部会では川崎繁氏をお招きし、博物館法の制定時当時の様子をお聞きし、博物館法について理解を深めることができた。今回は引き続き国内の博物館行政について考察を行い、検討を加えることとなった。

第10回研究部会では東京都の博物館登録を担当されている原真麻子氏をお招きし、実際の登録手続きの流れや登録制度から見た博物館事情などをテーマに話題提供していただいた。以下にその概要を紹介する。

1. 登録手続きの流れ～東京都の試み

現在博物館登録の手続きは国の許認可業務を各都道府県に委任され実施している。東京都における登録手続きの実際について順を追つて報告があった。まず登録を希望する館に対して相談を受付けている。その際、設置目的、組織運営、展示・事業、施設、資料等の博物館概要を把握する。その後、内部職員で構成する登録審査会にて協議し、登録認可するために必要な調整事項、方針を決定する。審査会での登録方針は、再度、登録を希望する館に示され、登録申請の意志の確認をするとともに博物館登録要件を満たすよう指導、助言を行う。登録申請書、現地を確認した上で受理する。申請に基づき登録審査会にて登録の審査、決定がなされる。登録決定は当該博物館と地元の教育委員会に通知され、文部省に報告される。

現在、登録博物館は66館、相当施設は28館に上り、平成7年頃から登録相談件数は急激に増え、平成8年には26館に上ったが、その後いくらか減少している。

2. 登録制度から見た昨今の博物館実状

近年登録件数が増えた要因の一つには、登録によるメリットがあげられるであろう。特に私立博物館の場合税制上の優遇措置（固定資産税、都市計画税、事業税などの控除）があり、財団の設立とともに大きな魅力になっているようである。経済状況の悪化の影響は、博物館にも及んでいるようである。また、博物館法が制定された当時に比べ東京の土地は少なくなり、その利用は複雑化している。商

業ビル等の中に博物館が設置されるなど、博物館が複合施設として組み込まれた例では、複合施設の所有権との関連で博物館の面積をどのように算定するかが問題である。また博物館の建物内における学芸員の研究室や教育普及のためのスペースが貧弱であったり、資料の保管場所の防災、防犯などの保管上の問題もみられ、現行のままでは行政指導にも限界があるのが現状である。

一方、公立の博物館においては先の施行規則改正により、学芸員の人数制限が外されたこともあり、登録審査の際では、適正な人数をどのように算定するかもこれから課題である。

3. 登録制度と関連する法令との調整

博物館法及び施行規則を運用し、登録手続きを実施する場合様々な法令との調整が必要となってくる。文化財に関する法令、税法、法人登録法、旅館業法、興業場法などである。東京都の場合、関係する部署との連携に努力し、博物館登録の道を開いているようである。

会の後半は参加者からの質問に答える形で議論を続けた。

【会員】博物館の登録後の追跡調査は実施しているか。

【原】是非やりたいと思っているが、実際には実施していない。また登録後の義務はほとんど無く（文部省の社会教育統計への協力程度）、自主的に年報等の資料を送付してもらっている。

【会員】アメリカの博物館協会は10年間を単位として博物館の登録の更新を行い、最後の3年間は更新のための再審査を実施する期間となっている。

【原】学芸員の人数制限が取り払われたことで登録要件が緩和されたが、一方で行政指導の場面が増えたようである。



【会員】いい意味での地方分権をめざす必要があるのではないか。

【会員】登録博物館のメリットは【会員】税制上のメリット以外に精神的なメリットがあるのではないか。

【原】学芸員のための高度の研修や推薦枠のある研修の場合は登録・相当施設を優先している。

【会員】文部省の博物館に対する補助金等は登録博物館を優先している。

【会員】登録博物館には科研費の申請ができるようになるなど新たなメリットを考える必要があるのではないか。
など

最後に数人の参加者から各博物館の実状を述べてもらつた。各博物館とも様々事情の中で運営されており、博物館の公共性をあらためて考えさせられることとなつた。本研究部会では本年度は主に国内の博物館制度や博物館の事情について様々な考察検討を行つてきた。今後もこのようないくつかの問題について各会員からの率直な意見を取り上げ、国内における博物館制度の諸問題について実状をふまえながら具体的に検討をしていくことが確認された。

本年度の活動を以下にまとめておく。

平成10年3月7日（土）

JMMA第3回大会研究協議会
第8回制度問題研究部会

(理論構築研究部会と合同)

「学芸員の養成過程と現職研修について」
場所：学習院大学

平成10年6月27日（土）

第9回制度問題研究部会
「博物館法制定当時の思い出」
場所：国立科学博物館
講師：川崎 繁
参加者：21名

平成11年1月23日（土）

第10回研究部会
「博物館登録手続きの実際－東京都の場合－」
場所：国立科学博物館
講師：原 真麻子
参加者：24名

敬称略

(幹事・小川義和／国立科学博物館)

理論構築研究部会

平成10年度第3回研究会報告

1. 開催の趣旨と経緯

当部会は平成10年度のテーマとして「連携」を選定し、第2回は「企業等との連携」と題して、科学技術館と千葉県立現代産業科学館のこれまでの活動内容と今後の企業連携や役割分担等の在り方等についての理解を深める機会を実施いたしました。

今回は、最近特に生涯学習の一環としての博物館活動の一形態としての学校教育との連携が求められており、そのような状況を社会教育という大きな枠組みからみた「学校教育と博物館活動の連携」の全国的な状況を廣瀬氏から御報告いただき、実際に連携事業を開催している「子ども科学博物館の活動事例」を安藤氏から御紹介いただく機会を企画し実施しました。

2. テーマと報告者

「学校教育と『融合』する博物館活動

—歴史系博物館の動向を中心に—」

国立教育会館社会教育研修所 広瀬隆人氏

「学校教育との連携

—伊勢原市立子ども科学館の実践—」

伊勢原市立子ども科学館主幹 安藤洋一氏

3. 開催日時・場所・参加者等

平成10年12月12日（土）14:00～16:30

国立科学博物館 特別会議室

参加者 30名

4. 報告の内容

(1)「学校教育と『融合』する博物館活動－歴史系博物館の動向を中心に－」

社会教育研修所の広瀬氏からは、氏の幅広い情報の中から社会教育の最近の考え方やその動向から全国の博物館の学校との連携の歴史と現状と課題までを紹介していただいた。その内容の概要は以下の通り。

「博物館と学校教育との関係は、最近は主として博物館関係者に論じられているが、その原因として考えられるのは欧米の事例に学ぼうという博物館関係者の努力の反面、学校の教員の社会教育に対する無理解や無知によるものである。このような状況を打破するための新しい博物館の新しい試みが見られる。

歴史的に見れば、“千葉県立博物館・美術館利用の手引き”(千葉県教育庁文化課1973), “小・中学校における博物館利用事例集Ⅰ・Ⅱ”(同所1980, 1982), 埼玉県では“社会教育施設での学習－学校利用の手引き－”(埼玉県教育局社会教育課1991), 群馬県では“学校と美術館・博物館とのネットワーク化に関する研究”(1994)という報告書が出されており、社会教育の立場から県教育委員会の役割や連携の際に必要な印刷物等の要件

を明確にし、学校の連携を模索する積極的な動きがあった。最近の例としては、川越市立博物館の博物館利用の手引き“やまぶき”(1991)があり、博物館に親しみ、自らの学習のために生涯にわたって博物館を活用する青少年の育成するために次の4事業を行うこととしている。

- ・学校教育における博物館利用についての研究事業
- ・社会科授業における博物館活用（バス配車）事業
- ・市内小中学校の資料室設置への援助
- ・青少年の学校外活動の充実を図る事業

このような試みから結論的にいえる博物館と学校教育の融合の条件としては、

- ・博物館と学校教育の融合に関する調査研究の充実
- ・学校教育支援のための資料（貸し出しリスト）の整備
- ・博物館の支援体制の整備充実（博物館への教員の配置）
- ・教員を対象とした学習機会の充実

があげられる。しかしあまりに学校教育へ傾斜した博物館活動にならないように

注意したい。

(2)「学校教育との連携—伊勢原市立子ども科学館の実践—」

中規模な市立科学館の学校教育との連携の成功実践例として、伊勢原市の子ども科学館の運営の考え方とその実践例を安藤氏に紹介していただいた。博物館職員に動物のあだ名をつけて子ども達に親しみを感じさせているユニークな活動内容の概要は以下の通り。

伊勢原市立子ども科学館は、平成元年に開館したプラネタリウムを持つ図書館との複合施設である。年間利用者は約6万人で、小中学生を対象とする教育委員会の社会教育部に所属する、職員13名の社会教育機関である。学芸員はいない。展示テーマは、生命の科学であり6つのコーナーに分け、97点の展示物がある。

学校との連携という点では、

- ・移動教室（学校からバスでの見学、特徴的なものとして東海大学付属病院での長期入院の子ども達のた

めの院内学級がある。また運営計画を策定するための「学校利用検討委員会」、「プラネタリウム等学習検討委員会」を設置している。“移動教室利用の資料”あり。)

- ・移動子ども科学館（子供会、幼稚園・保育園、小中学校等からの依頼で、工作・実験と天体観察会等の子ども科学館のメニューを配達する事業である。）
- ・教職員の研修の場
- ・館事業への教員の登用
- ・理科関係機器及びビデオソフトの貸し出し
- ・館運営協議会委員への教員の登用
- ・館事業のチラシ類の配布
- ・博物館実習生の受け入れ

等を行っている。「連携という段階ではなく、協力の段階と思っている」とのことだった。

学校連携がうまくいっている本当の理由は、

- ・行政的な枠組みの段階
- ・行政の係長と学校の教頭・校長クラスとの連携
- ・現場の教員と博物館職員との具体的な事業についての共通理解

の各段階における協力が不可欠で、教育委員会の課長クラスに相当する安藤氏の個人的なネットワークによることが窺い知れた。

これらの報告の後、簡単な質疑応答を行って研究協議を終了した。

(部会長・高安礼士／千葉県立現代産業科学館)

〈平成10年度第4回研究会〉

日時：平成11年2月20日(土)13:30～16:00

テーマと報告者：

- ・「市民との幅広い連携の在り方
—博物館の枠組みを考える—」
野田市郷土博物館 金山喜昭氏
- ・「障害者と博物館 一盲学校の博物館活動を中心として—」
福島県立博物館 長島雄一氏



● 事業戦略研究部会 ●

昨今、地方自治体、とりわけ県レベルでの自然史博物館設立の計画が目白押しであるが、一体どのような自然史博物館が求められているのだろうか？こうした問題意識のもと、1998年12月5日、群馬県立自然史博物館に長谷川善和館長をお訪ねし、「日本にはこんな自然史博物館が必要だ！」と題して、第1回事業戦略部会を開催した。長谷川館長から、博物館の運営のノウハウやその苦労など、国立科学博物館（1965年から14年間勤務）や群馬県立自然史博物館（現職）での経験やエピソードを交えたざくばらんなお話を伺うことができた。伊藤收学芸課長にも御同席頂き、準備室時代も含めたお話を伺った。今後の自然史博物館のあり方、そして、その事業評価の基準を考えるにあたって、大変示唆に富むものであった。以下に簡単に内容を紹介させて頂く。

博物館における研究活動

お話の中で、長谷川館長が強調なさっていたことのひとつが博物館における研究活動のあり方である。研究の大切さを説きながらも、研究をする者たちが博物館の展示や展示を見にくる人々とまったく切り離されてしまう状態は好ましくないと、研究と展示の間によい関係をつくることが博物館の運営の重要な課題であると指摘された。また、学芸員は論文で評価されるのが常であり、展示のための研究やレプリカづくりなど、展示業務に関わる部分は博物館の中でなかなか評価されにくい点にも触れられ、こうした論文以外の仕事も評価する体制をつくっていく必要があると述べられた。充実した博物館活動を行っていくためには、それにあわせて博物館内部での職員の評価基準をも見直す必要があるとのご指摘であった。

博物館における研究はすべての活動の基本となるものであり、学芸員の中にも学術的研究をしたいという希望がある一方で、県立レベルの博物館の場合、県の財政上の問題から、十分な研究費を得ることができないという実状がある。従って行政の方も博物館に研究の成果を求めてはいないのが現実であるという。博物館の学芸員は、行政からは研究活動は求めらない一方で、学芸員としては研究も必要となる、という板挟みの状態になっている。博物館が今後どのように事業を開拓していくのか、そしてそのために学芸員に何を求めていくのか、行政も含めて、評価の基準を定める必要がある。

コレクションの重要性

海外の博物館と比較して、日本の博物館のコレクション管理は遅れている、とコレクション管理の重要性も強調された。大英博物館の例を挙げると、コレクションの管理を行うキーパーと研究を行うキュレーターは完全に分業されており、研究をしながらコレクションの管理を行うことなどできない、と考えられている

という。研究者がいなくなつても、コレクションがあればそのコレクションの研究をしたい研究者がいすれば集まつてくる、とさえ言われるくらいで、博物館におけるコレクションの位置付けは非常に高くなっている。他方、日本ではコレクションの管理を専門とするキーパーのような存在はまだ見受けられない。コレクションは研究や展示の基本となるもので、もつとその重要性が認識されなければならない、ということをくり返し強調された。コレクションをしっかりと管理できる博物館にはよいコレクションも寄付されるであろうし、従つてよい研究者も集まつてくる。博物館がコレクションをどのように扱っているかは、その博物館の他の活動にも大きく影響を及ぼすものである。博物館の事業評価を行う際の重要な指標となるだろう。

実物主義

コレクションは展示にも十分に活かされている。実物を前にすることによって得る感動、実物から学ぶ効果を大切にしたいとの考え方から、展示の製作にあたつては、実物にこだわったという。当初の展示の構想は、群馬の地域性を全面に出したものにしよう、というものであったそうだが、そうした地域性のつよい標本ほど入手しにくことが分かり、比較的入手しやすい海外からの標本を用いて、逆にグローバルな視点から群馬をみつめるという展示ストーリーに変更したとのエピソードを伊藤課長から伺つた。伊藤課長は高校の教師であったというご経験から、実物による教育効果も強調された。地元産の標本にこだわり続けて乏しいコレクションや映像を用いて陳列館なるものをつくるよりは、実物に出会うことのできる博物館をつくろうとしたとのことである。標本の入手にあたつても、他の博物館が持つているものとはなるべく異なる標本、またはさらに良い標本を収集するよう努力されたということで、世界を飛び回つての標本入手のための苦労話は大変興味深かつた。よい標本を入手するためには、値段や入手のタイミングなどについて行政の理解を得る必要もある。質のよい標本を求めてたいへんなご苦労をなさつた様子が伺え、博物館におけるコレクションの質の重要性を改めて認識させられた。

技術者の必要性

館長自身が長くレプリカづくりに携わつておられた経験から、博物館内にレプリカやはく製をつくるための技術者を置く必要性も指摘された。博物館の側にこうした技術を持っている人がいないと、技術に関する知識が不足していることから、展示の際など、業者へ「丸投げ」してしまう現状があるという。博物館が主導権を持ってレプリカづくりや、展示つくりを行つていくためには、博物館が技術者を持ち、そのノウハウを蓄積していくことが重要なのである。ノウハウの蓄積という点からすれば、技術者以外の職員についても同

じことがいえる。職員の頻繁な転勤は、博物館の中での仕事が蓄積されにくくなるので好ましくない。行政側の理解を必要とする部分であるとのお話であつた。

情報源としての博物館

博物館にはマスコミから一般の人まで、さまざまな人からの質問が寄せられる。こうした質問への対応は博物館の日々の業務の大きな部分を占めているという。手紙や電話のみならず、インターネットを通しての質問も数多く寄せられている。資料を管理し研究するという従来の博物館の姿からすると、こうした業務は学芸員の本来業務以外のものととらえられてしまうが、もはやそうともいえない実状である。博物館に対する利用者の信頼を得るためにも、質問等への対応はおそらくできない部分もある。群馬県立自然史博物館でも、情報関係のための職員が配置されていないため、日々寄せられる質問への対応には一番苦労しているとのことであつた。

利用者の声を反映した展示

どのような点に展示の工夫、独自性があるのか、という参加者からの質問に対して、展示をつくる過程でいろいろな機関からの意見を聞き、それを活かしていくことに触れられた。例として、盲学校の先生方から、資料をガラスのパーテイションの後ろに置くとい

うことは、弱視の方々を博物館から排除するようなことになると訴えられ、パーテイションをはずしたり、資料の側に近づいて見ることができるような位置に資料を配置するなどの工夫をしたとのエピソードを伺つた。博物館側としては、大切な資料をむきだしにすることで、傷付いたり盗まれたりするのではないかと心配したそうであるが、今のところ盗難などの事故はないとのことである。その他、弱視の方々への配慮として、大型のジオラマの縮小模型についてお話し聽取った。例えば、12メートルのブナ林のジオラマでは、弱視の方々にはその全体の様子が分かりにくいようであるが、ジオラマの縮小模型を目の前にして見ることで、その全体像をつかむことができるとのことである。盲学校の先生方には点字のラベルを作つてもらうなどの点でも協力を得たという。利用者の立場に立つて展示をつくるためには、実際に利用者の方が何を求めているのか、意見を聞くことが大切であることを実感した。

この他、化石の購入に関わる数々のエピソードなど、興味深いお話をたくさんお伺いした。博物館の現場と行政との認識のズレから生じる苦労も伺い知ることができた。御自身の体験やお考えを親しく我々と共有して下さった長谷川館長と伊藤課長の両氏に改めて感謝申し上げたい。
(幹事・斎藤恵理／文化環境研究所)



「群馬県立自然史博物館発行のリーフレットより」

● ソフトサービス研究部会 ●

平成11年度への展望

平成10年度は、ソフトサービス研究部会では、当初に予定していた研究会の実施が、様々な理由から全うできておりません。

幹事である私の不手際が最大の理由であり、期待されていた一部の会員の皆様、並びに学会事務局諸氏には大変ご迷惑をおかけしましたことを、まずお詫びいたします。

さて、心機一転、平成11年度は怠りの無いよう研究部会を順次開催していきたいと考えますので、よろしくご参加下さい。

【平成11年度テーマ】

『ミュージアム・サービスの創造プロセス』

【内容】

昨年度、十分に展開できなかつた、ワークショップ、インタープリテーション、ボランティアとミュージアム・サービスの関連を探ることを基調に、新たに、これらの手法や人的構成によるミュージアム・サービスの創造のプロセスに関して、サービス・マネジメントの視点から学ぶ機会も設けながら研究部会を開催したいと考えます。

◆個別テーマのイメージ

これらのテーマについては、研究部会参加者の皆様と研究部会の場での討議で深めていきたいと考えますが、あらかじめ幹事レベルがイメージする各個別テーマの概観を示しておきます。

1. ワークショップ

最近、いくつかのミュージアムで実践され始めている建設時のミュージアムづくりに関わるワークショップにおけるミュージアム・サービスの創造の事例や、開館後に地域社会や積極的な利用を行う市民とのミュージアム運営の協力にまで踏み込んだ形でのワークショップについて視点をあてたいと考えています。

これは、一面では、最近良く耳にする「市民参加」というキーワードと密接に関わる行為であり、もう一面では、地域や利用者に対する行政やミュージアムサイドのリレーションシップ・マーケティングの視点とも大きく関わるものもあるでしょう。

2. インタープリテーション

最近開館するミュージアムには、従来の接遇、案内の域を越えて、より積極的に展示やミュージアムに関わる利用者との橋渡し役として、インターパリターと呼ばれる人々が配置されることが多くなってきています。これらの人々に期待される役割やそのマネジメントについて学びたいと考えます。

3. ボランティア

ミュージアムの運営にとって古くて新しい課題を提供しているのが、ボランティアだと思います。

自館にとって、ボランティアが必要だと感じながらも、その制度づくりや実際の運用の手法がわからずに悩まれている館員の方も多いとお聞きします。

ボランティアを導入し、運用するコードイネートについて具体的な事例をもとに考える機会をつくりたいと考えています。

◆新しい時代のミュージアム・サービスの創造とミュージアム・マネジメント

これらの手法や人的構成は、ミュージアムと地域住民・利用者とのパートナーシップによるミュージアム・サービスの創造という、これからの中のミュージアムのあり方に大きく関わる事柄です。

この観点をどのようにミュージアム・マネジメントに組み込んでいくかということは、次のマネジメントへの新しい扉を開く「鍵」になることは間違ひありません。

皆様と一緒にこの第一歩を踏み出せることを願っています。

平成11年度の第1回研究会は、3月から4月にかけて、比較的早期に開催できるよう検討中です。

また別途お知らせしますので、奮ってご参加ください。
(幹事・重盛 恒一／トータルメディア開発研究所)

● 教育・コミュニケーション研究部会 ●

第2回研究部会報告

今期当部会のテーマである「移動展示の現状と課題」についてフランス国立科学産業都市ラ・ビレットにおける移動展示（巡回展示物）について(財)日本科学技術振興財団・科学技術館カルチャーエンジニアリング事業部課長水嶋英治氏、同学芸員谷本嗣英氏よりご説明をいただいた。

○説明の概要

ラ・ビレットはフランス・パリの中心街から20分に位置し、50ヘクタールの広大な公園の中に広がる世界最大級のそして世界有数の革新性を誇る科学技術普及施設であることはご存知のことと思われる。中でも3,000m²の参加体験型展示施設「エキスピラ」をはじめ、マルチメディアの図書館「メディアテック」など国家プロジェクトとして発展を続けている。入場者数はルーブル美術館年間500万弱に対して513万人と、子供から青少年、そして大人までに幅広く科学技術の普及・啓蒙活動を展開している。

今回は特に科学技術館が所有する巡回展キットを通して、移動展示について考えてみた。巡回展示についてラ・ビレットの方針は、

- 1) フランス文化を輸出する（言語、科学文化の普及、教育への貢献）－諸外国のパートナーと提携する。
- 2) パリで開催された特別展を地方に巡回させる。
 - ・フランスにおける地方分権の推進（1981年 - ミッテラン大統領発案による）
 - ・地方に展示場を新設 - 産業の活性化
- 3) 地方の科学技術産業センターCCSTI(Centre Culture des Sciences, Technologie et Industrie)との協力を深める。

展示内容は、学ぶ喜び、知る楽しさのもと、5つのテーマにより構成されている。①イメージの世界：「共通言語としての映像」「光と色彩」「映像と運動」「見えないものを見る」「幻影と鏡」など。②数あそび：数学のプロセスをオブジェを用いながら体感する教育的でゲーム的な展示。③楽しいコンピュータ：生活に密着した視点でコンピュータを理解する。④生物の不思議。⑤青い地球。

展示における教育マニュアル・組み立て施工マニュアル・メンテナンスキット等も整備され、ラ・ビレットのVIマニュアルも完備されている。他様々な方面におけるフランスとの協力体制もしかれているようである。5つの各々の展示面積は200~300m²となり、日本側展示との連動も企画されている。又メンテナンスについては、日本の現状を考えた修理又は作り替えなども行われ、強度的にも安定している。

実績としては、1995年3月以降全国各地の16館に延べ

40テーマが貸し出され、累計約40万人が入場した。

○今回の説明を受けて

フランスのラ・ビレットにおいては巡回展は目的が明確であり、展示テーマ、構成なども明確である。日本における移動展示企画に参考となる点が多々見受けられた。現状の日本における移動展の課題として、(何を)、(誰に)、(何故)、(どこで)、(いつ)、(どのような手段で)、を明確にする必要がある。(何を)、(誰に)、(何故)の目的達成は成されているが、(どこで) - 公共施設が多く、(いつ) - 開催日時は春・夏休みに集中し、(どのような手段で) - 他の企画とのタイアップ - 商業施設とのイベント的連動など時期や場所や方法を多岐にわたって展開することもできる。

次にコミュニケーションについて、各館の連絡、企画内容のプロモーション（広報）活動等、積極的に実施する必要もある。

移動展示は器(館)を持たない博物館であり、展示スペースを持たないが故に、常にどこかに展示されてこそその存在価値があると言える。せつかく良い移動展示を企画製作してもそれが活用されるコミュニケーションがなければただの収蔵物に過ぎない。今回のラ・ビレットにおけるトータルな運営をお聞きして、そのような問題を提起させられた。

改めて98.6.20に発表した倉本部会長の「移動展示とは」を併記する。

(移動展示とは)

博物館の展示業務の一つとして移動展示（巡回展示、Traveling Exhibit、Movable Exhibit、Mobil Exhibit . . . ）というのである。

その多くは特定のテーマの下に一つの目的を持って、限定された規模で、その目的、趣旨にかなった展示物を、或る構想の下に立てられた企画に沿って、展示物を制作したり、各所に分散した所有者から借用して一つのパッケージとしてまとめたものを、何ヶ所かの希望する博物館等を巡回して、より多くの人々に観てもらおうといったものである。

ここでは、それらの中で科学技術に関連したものについての移動展示のマネージメントを取り上げてみる。

博物館における教育コミュニケーションという観点からみて、出来るだけ多くの人とコミュニケーションを持つとする時、博物館の常設展示は、来館者にとって、博物館を訪れる目的対象物であり、その展示物が本物であるか、またはそれが殆ど本物と見間違える程良く出来たレプリカであっても、一般の人は、その展示手法、展示技術の素晴らしさによって魅了される。

こういった常設展示とは異なり、ある一つの課題に基づく展示を、一つの理念に基づいて作られ構成された展示を、より多くの人々に、都市のみならず、地方の人々、或いは海外の人々にも観てもらうことにより、コミュニケーションの輪を広げることが出来れば、素

晴らしい頭腦によって企画され、貴重な財源によって制作された展示物を効果的に有効に活用することを目的として、その展示を利用したいと希望する博物館、科学館、展示ホールなどの要望に応じて、期間を区切った特別展として賃貸契約基づいて移動、巡回するものを移動展示ということとする。

(幹事・弓場哲雄／(株)小林工芸社)

第3回研究部会報告

教育・コミュニケーション研究部会では、海外において実績を挙げている“移動展示”とそのマネジメントについて取り組んでいる。第2回会合は昨年（平成10年）9月5日（土）に、東京北の丸の科学技術において、同館の水嶋英治氏と谷本嗣英氏にお話を聞いていた。水嶋氏は、フランス国パリのラ・ヴィレット科学産業都市において研鑽を勵んでおられたので、そこで運営している移動展示を中心として、また、谷本氏は科学技術館が行ってきた巡回展示についての具体的な運営に関してお話をいただき、活発な質疑応答を行った。部会に先立つて、館内の参加・体験型を主とした展示を見学した。30名以上の参加者で盛況であった。

第3回は同じく1998年12月19日（土）につくばエキスポセンターにおいて“移動展示の現状と課題－つくばエキスポセンターの場合－”ということで同センターの有沢精氏と中沢美合さんに同センターが運営している巡回展示について話を聞いた。先ず同センター1階展示場における展示物を見学した後、移動展示のマネジメントの詳細にわたる講演の後活発な質疑を行った。つくばという都心を離れた場所での部会であつたが14名が出席した。会後、“エルベ”というドイツレストランで、ドイツビールとドイツ料理に話がはずみ懇親を深めた。

つくば科学万博記念財団は全国科学館連携協議会の事務局であり、移動展示は、その業務の一つとして行っている。全国科学館連携協議会は、米国の科学技術館協会（A S T C : Association of Science and Technology Centers）を参考として設けられたもので、この巡回展示物の他、会員館の役職員を対象とした海外博物館視察研修や国内研修などを行っている。この巡回展示は、科学技術基本法（平成7年制定）、科学技術基本計画（平成8年制定）に則って実施されている科学技術理解増進事業の一環として実施されている。現在、つくば財団が実施している巡回展示は、宇宙開発、海洋開発、サンクルーザー、科学遊園、おもしろ実験、サイエンス展示Ⅰ&Ⅱの7種類である。以下、この巡回展示のマネジメントについて略述する。

巡回展示の利用希望館は毎年（9月～10月）翌年度の利用希望を事務局に提出し、事務局ではその希望を調整して翌年度の巡回スケジュール案を作り、展示企画運営委員会において決定し、12月上旬に希望した館に通知すると共に希望館、展示業者、運搬業者と打ち合わせを行い実施している。

この巡回展示物については、スポンサーの意志も考

慮しながら、展示実施をする科学技術館の要望に副したものとするよう配慮されている。また、各展示について、その展示に必要な所要面積、展示物の梱包・運搬、組立、解体、補修、撤収、所要電力等についての資料を提示することが必要があるので、これらについて記載されたメニューが用意されている。

また、運営上の問題点としては、1)受入館について周辺道路、搬入路、駐車場などの外部情報、建物の構造、展示場、電気回路等の状況、展示期間中の梱包材の保管場所などを確認しておくことも必要である。2)設置時には立ち合い、展示物の運搬中に生じた瑕疵、展示物の設置後の調整、取扱書についての解説などを行つておく。3)展示物の搬出時にも立ち合い、展示期間中の運用状況、展示物の撤去に当たつて数量・劣化状況の確認などを行う。4)撤去した展示物は、次の展示までの間における保守点検、保管、その所要経費の予算計上確保が必要である。また、これら展示物の補修、特に巡回先での故障、修理は種々雑多であり、そのための予算措置が必要、かつ問題である。

今までの実績、経験から、巡回展示実施館の希望としては、次のようなものがある。

- 1) 時代の要請にあつたテーマの展示を希望
(エイズ、ロボット、宇宙……)
- 2) 参加型、体験型の展示
- 3) アミューズメント性のある展示
- 4) 対象者に合つた解説書、パンフレット（子供向、小・中学生向、成年向、専門家向、英文……）
- 5) 人手のかからないもの
- 6) インストラクターの派遣・研修
- 7) 解説パネル、データを最新のものに
- 8) 所要経費の助成、無料化

この巡回展示は平成6年（1994年）以来行われており、テーマも少しずつ増えている。現在は7テーマのものがあり、今までに70回延3,000日を超えており、全国科学館連携協議会会員館80の中、47館が利用している。これらの内で今までに4回利用している館がある。

これら巡回展示は、テーマが良く、コンパクトで各地の科学技術館で活用されれば、一つの館での常設展示と異なり、広がった地域で、多くの人々に利用してもらえるという長所があり、今後有効に活用、発展していく事が期待される。学会としてもそのあり方、効用、効果、評価等について検討し、その開発、進展に寄与できればと思う。部会としては今後、できればあと1ヶ所事例研究をした上で移動展示のマネジメントについてのまとめを行い次のテーマへと展開したい。次のテーマについては部会で相談の上確定したいが、昨年話にでていた、博物館における教育・コミュニケーションの活性化におけるエデュケーター・エンタテイナーの問題などを取り上げてはと考えている。

（部会長・倉本昌昭／(財)科学技術広報財団）

● ミュージアム・ショップ研究部会 ●

発足から2年目となった平成10年度。9年度は、いくつかのミュージアム・ショップを見学し、担当者からお話を伺うなどしましたので、今年度はそういうショップでの商品の流通の事情はどうのようになつてゐるかについて焦点をあてました。

まず、最初は、

第1回研究会 7月7日(火) PM7:00~9:00

「ミュージアム・ショップの書籍コーナーは、どうなつているの?」講師／八重洲ブックセンター新規事業開発部部長 萩野準二さん (株)ミュゼにて

として、ミュージアム・ショップになくてはならないはずなのに、なかなか充実のはかれない日本独特の書籍の流通とミュージアムにおける「ブックショップ」のあり方についてテーマをもちました。

講師には、ミュージアム・ショップに関心の深い八重洲ブックセンター新規事業開発部部長の萩野準二さんを迎えるました。書店人である萩野氏は、まずミュージアム・ショップの書籍の品揃えに関して「まだまだ未熟である」と前置きし、日本の書籍流通の仕組みや実際にいくつかの美術館や博物館でどのように本が仕入れられ、販売されているのかを説明されました。この内容については、当会報でお伝えしたところですが、印象に残ったのは、独特な日本の書籍流通や販売においても、公正取引委員会から「著作物再販制度」の改善を求められており、これまで値引きとかバーゲンなどこれまでにない取引が模索され、再編期であることです。萩野氏は、そういう現状をふまえてミュージアム・ショップの書籍コーナーは、出版社から直接仕入れる経路と取次店から経路を利益に応じて使い分けることが良策なのではないか、そしてミュージアムの情報発信が書店と連携してできることが望ましいと提案されました。ふだん、あまり聞くことのない出版流通の話は、参加者に大変好評でした。

なお、この会は時間帯を夕方にして、(株)ミュゼで行いました。平日の夜の会は初めてということもあって、参加者は36名。椅子が足りなくなるほどの人気でした。

この研究会の後も、会報や参加者から、どうやつたら自分のところのミュージアム・ショップの本コーナーを充実させることができるかといった問い合わせをいただきました。ミュージアム関連の出版物もどんどん増えています。しかしながら、一般の書店ではそういうコーナーも限られてしまします。ミュージアム・ショップのブックショップこそミュージアム関連の本を置いて紹介し、販売につなげてはいかがでしょうか。そのミュージアムに合った本を積極的に揃えていくことで、ミュージアム・ショップの魅力が倍増していくでしょう。

第2回研究会 9月3日(木) PM4:00~6:30

東京ピックサイト「ギフト・ショー」を見学しよう
〈テーマ〉雑貨業界からミュージアム・ショップ
を見る

次の研究会は、ミュージアム文化研究部会と合同で行われました。

年2回行われる雑貨を中心とした業者さん向けの「ギフト・ショー」を見学するというものです。「ギフト・ショー」は、日本で最大のパーソナルギフトと生活雑貨の国際見本市です。そのときどきの流行、新商品、提案したい商品など国内外から1700社あまりが出展します。今回第46回では、数あるブースのなかに「ミュージアム・ショップ」のセクションができました。主催者のビジネスガイド社では「ミュージアム・グッズが、美術館、博物館から街中へ、リゾート地へと広がっています。新しいショップづくりに役立ててください」と案内し、力を入れました。

ミュージアム・ショップ、ミュージアム・グッズが、商取り引きの現場に堂々と出るようになったことにも時代の流れを感じました。当日は、各会員が自由に会場を見学してから「ミュージアムグッズとは何か」の講演を聴き、討議するというものでした。会場では、どのようにショップを運営したらいいのか、仕入れはどうなのかという質問、逆にどのように自社のミュージアム・グッズを売つていけばいいのかという質問など、立場の違う方々の質疑応答がなされました。

「ギフト・ショー」は、まさに商談の場でしたからミュージアム・グッズはもちろんですが、一般的商品がどのような過程で取引されているのかを現場で見て、その真剣なビジネスの姿を肌身で感じるという意味でも、これまでにないインパクトがあつたと思います。

11年度は、ミュージアム・グッズ製作者、取引業者に焦点をあてる

今年度は、2回のみの研究会となりましたが、どちらとも意義深い会だったと思います。ともに一般の商品(書籍)の流通事情に目を向け、その市場のきびしさを感じ、またミュージアム・グッズやショップの優位性を確認したものでした。さらに、こここのところの長引く不況は企業はもちろんのこと行政にも大きく影響し、民間のミュージアムでは閉鎖されたところもありました。ミュージアムにとってミュージアム・ショップは、現実的に財政や宣伝効果として期待を寄せる存在となつてきています。

来たる11年度は、これらをふまえてさまざまなミュージアム・グッズ製作者、取引業者に焦点をあて現場を訪ねるなど、ミュージアム・ショップの現状、あり方などについて実践で役立つ研究、情報提供を行つていきたいと思います。
(幹事・山下治子／(株)ミュゼ)

投稿ご自由

侃々諤々

博物館教育の授業方法論について

沖縄県立博物館教育普及課長 前田真之

はじめに

近年多くの大学において、学芸員資格取得のために博物館関連科目を受講する学生が増えてきている。また博物館学に関する書物も増え、「博物館概論」、「博物館経営論」、「博物館資料論」、「博物館情報論」などに関する基礎的な学習が行えるようになってきている。しかし大学の授業や博物館実習において、実際にどのように教えているのか、またその実践の結果はどうであつたのか、学生からの評価をどのように授業にフィードバックしているのかについては仲々伝わってこない。

大学で実際に授業を担当するものの立場からするならば、お互いの授業に関する情報を交換し、教育の視点から若い人たちの育成をどのようにすすめていくべきか十分に議論できる場が広がつてくることを期待して止まない。ここでは、博物館経営論の授業の中で、学生に課した課題のレポートを紹介し、それをとおしてこれから授業の進め方について考えていくたい。

1. 課題の設定

1993年から1994年にかけてアメリカ国立歴史博物館のパブリック・プログラム部で研修を受けていた頃、ハンズオン・サイエンス・ルームのプロジェクトチームで働いていたリン・D・ディアーキンさんや旦那さんのジョン・フォークさんが著した『Museum Experience』やアレキサンダーの『Museums in Motion』(AASLH)からは多くのことを学んだ。

その一つは、“来館者の視点で博物館の施設をトータルに見る”ことであり、もう一つは“博物館が地域に何ができるのか”という視点についてである。前者の視点は、来館者の視点からみた評価をいかに館の活動改善にフィードバックさせていくのかという実践的な課題をもたらし、後者の視点はベトナム戦争のころ自人文化中心の展示から地域に住む人々の文化やマイノリティ－文化への関心を呼び起こす展示へと転換させ、さらに分かる展示の工夫等へと向かわせた。アメリカと日本という違いはあるものの、この二つの視点は日本にも共通する重要な内容を含んでおり、この延長線上に次の課題を設けて実施してみた。

〈課題1：二人一組になって、アイマスクをした人に展示の解説をしてみよう！〉

①ペアになって見学に行く博物館・美術館を決める。

沖縄国際大学「博物館経営論」課題レポート（担当：沖縄県立博物館教育普及課長 前田真之 口号 84-2243）

課題 「二人一组になって、アイマスクをした人に展示の解説をためしてみよう！」

（展示解説までの準備）

- ① ベアーアーになって見学に行く博物館・美術館を決める。

- ② ベーカーになる相手の人は、この授業の受講者でも良いし、また別にお願いできる人でもよい。
＊受講者同士でベーカーになる場合は、一つのレポートで構わない。
＊受講者がベーカーでない場合は、展示室の解説終了後、相手の感想も聞いて記録すること。

- ③ アイマスクがあれば、アイマスクを着用しても良いが、ない場合は目をつぶるだけでもよい。

- ④ レポート提出者が、アイマスクをして解説を聞く方にまわるか。それとも解説を行う方にまわるのかは、本人に任せせる。

- ⑤ 解説を行う展示室は、博物館・美術館の1展示室で構わない。但しもっと挑戦してみたい場合は複数の展示室でも構わない。

- ⑥ 解説の中身は、解説者の今の力量ができるものでよいし、その本人の自由な判断に任せせる。

- ⑦ 展示見学場所で不審に思われないよう、見学者の方に説明をして了解を取るのも気持ち良く見学するための方法である。

（レポートの提出期間）

* 11月28日（土）の「博物館経営論」最終講義の日に提出すること

- 1 -

- ②ペアーになる相手の人は、この授業の受講者でもよいし、また別にお願いできる人でもよい。

*受講者同士でペアーになる場合は、一つのレポートで構わない。

*受講者がペアーでない場合は、展示室の解説終了後、相手の感想も聞いて記録すること。

③アイマスクがあれば、アイマスクを着用しても良いが、ない場合は目をつぶるだけでもよい。

④レポート提出者が、アイマスクをして解説を聞く方にまわるか、それとも解説を行う方にまわるのかは、本人に任せる。

⑤解説を行う展示室は、博物館・美術館の1展示室で構わない。但しもつと挑戦してみたい場合は複数の展示室でも構わない。

⑥解説の中身は、解説者の今の力量ができるものでもよいし、その本人の自由な判断に任せる。

⑦展示見学場所で不審に思われないよう、見学先の方に説明をして了解を取るのも気持ち良く見学するための方法である。

レポートからみた結果：

この課題にこたえるため沖縄県内の博物館・美術館を回つてもらつたが、①障害者に対応できる施設の在り方のほかに、②障害者に対する解説そのものについても、教育的な視点から今後よりいつそうの対応が必要なことが分かつてきている。

〈課題2：ビール缶の質問づくり〉

No. 1 (ビール缶の質問づくり)

*与えられた資料をスケッチしたあと、その資料を観察して質問をつくりましょう。

*質問が20以上にわたる場合は、用紙の裏に書いて下さい。

No.2 (ビール缶の発問づくり)

*児童が、①ビール缶そのものに関心を示し、②ビール缶をじっくり観察するように仕向けるため、上に書いた自分の質問づくりから、5つの質問を選び出し、発問を構成してみよう。

*あなたは、なぜこの5つの質問を発問として選んだのか、その理由を書いて下さい。

*あなたは、この発問により、児童に何に着目してほしいと思いましたか。

レポートからみた結果：

博物館の資料を大学に持ち込み、それを観察してもらうことができないので、学生の身近にあるものを使って、質問づくりを試みることにした。アメリカにおいては、シカゴのフィールド自然史博物館の教育課が出版した『Teach themind, touch the spirit』では、観察に目を向けさせるためにどのような実践を行つていたらよいのか、クリップを素材にした資料分析が行わされており、さらに質問をすすめるための戦略として①情報の収集、②情報の組織化・プロセス化、③知られている情報からの推論・仮説、組織原理の発見の方向

ビール缶の質問づくり

No.1

沖縄国際大学 学部番号() (1~II)部() 学年() 年 名前()

*与えられた資料をスケッチしたあと、その資料を基にして質問をつくりましょう。(1/1~2/8の授業時に提出)

The image contains several elements related to a beer can:

- Sketch of a Beer Can:** A hand-drawn sketch of a cylindrical can with a pull-tab at the top. The label on the front features the word "DRAFT BEER" above a stylized logo.
- Label Sketch:** A detailed sketch of the can's label. It includes the brand name "オリオンビール" (Oriental Beer) at the bottom, the volume "350ml" on the left, and a central logo featuring a stylized mountain or volcano.
- Stamp:** A circular stamp with Japanese text, likely a collector's mark or a stamp from a specific location.
- Seal:** A circular seal with Japanese text, possibly a manufacturer's or distributor's logo.

*質問が2以上にわたる場合は、用紙の裏に書いて下さい。

1. なぜ強度・エネルギー・パワートレーラー車や飛行機で「つなぎ」ですか。人手一匁も下での仕事。
2. ハイカラ系芸能「タレ」「ゲン」が手本です。会社の真面目さはどのよううな活動をしてるのでしょうか。
3. 運営組織の「JCI」には何ですか?
4. その上面のダーリン上トを周囲する方に書いてある「どうして何を食べているのですか?」
5. 上下に異なりていて「C」と「D」は何を意味しているのですか?
6. 例題3は「C」と「D」が何を意味するか表示してある理由は何ですか?
7. 第一マークの意味は何ですか?(ハートの下に付いてます)
8. ORION ISLAND FESTIVAL THE RIDE IN THE SUN 豊かな島を走る車の音楽(音楽の名前)は?
9. ハートマークには「ハート」が書いてあります。何ですか。
10. 例題3と並んで書いてあるこの会社のマークは何ですか? 例題3と同じくアドバイス下さい。
11. 例題3のマークの下に「(株)オリオンビール」の左側に「(株)オリオン」の右側に「(株)アドバイス下さい。
12. 例題3の上の山の「ホール」「コーン」「スター」とは何ですか? また、どこで「ホール」(13年生)の「ホール」と「(13年生)」の「ホール」とは何かがどうして何の意味でありますか?
13. ハートマーク(二重丸と五角形)と「(株)オリオン」とは何かがどうして何の意味でありますか?
14. ハートマーク(二重丸と五角形)と「(株)オリオン」とは何かがどうして何の意味でありますか?
15. 例題3の上の山の「ホール」と「(株)オリオン」とは何かがどうして何の意味でありますか?
16. ハートマーク(二重丸と五角形)と「(株)オリオン」とは何かがどうして何の意味でありますか?
17. 例題3の上の山の「ホール」と「(株)オリオン」とは何かがどうして何の意味でありますか?
18. ジャンルと本名の連絡手段が何ですか? 何をいひますか? 何をいひますか?
19. 「JCI」の会員は、何ですか? 何をいひますか? 何をいひますか?
20. オリオンビールの由来は、奈良時代の「大和」(おおわ)より「おは」(おは)は日本で「カモキ

シマ)から、いぜ、ハーバードに、オオハラニヤー(大和)を書かれていたのである。それで、南洋地方や
製造販売が書かれていますが、「オオハラニヤー」の中の「3つ星」の意味はどういうのですか?

- ② このビールの飲食店は、「オリオンビール」と「C」「D」と「E」の3つの星が並んでいます。なぜかと
も、も、ううん、このハートマークの下に付いてます。全名柄がわかりにくいのですが、これは、全名柄では
なく、他の柄にかたわらてて下さいなのですが。

ビール缶の発明づくわ

No.2

沖縄国際大学 学籍番号()

(①・Ⅲ) 部()

学年() 年 名前()

*児童が、①ビール缶そのものに关心を抱き、②ビール缶をじっくり観察するように仕向けるため、上に書いた自分の質問でから、5つの質問を選び出し、児童と構成してみよう。

同じような内容の質問は、ひとつとまりで考えてみました。

発見の順番	質問番号	上で書いた質問を書く
1.	1.15	ビール缶が発明しているといふ? CMやサドモ大人直がおひじりにビールを飲んでいるよね。いやー、ビールって何ででてるんだよ?
2.	16.21	さて、ここで問題です。
3.	2.7 9.10.20	『このビールの正しい名前に向ではうづ』 では、次に『この缶には、いくつマークや赤茶けがありま すか。また、そのマークや赤茶けの意味は何でうづ』
4.	14.21	マーカや赤茶けについての裏の事が書いてあるから、そこまでくわ ず。『このビールは、いつ、造られたものでうづ』
5.	1.23 24.25	この中では、書いてある事に注目して「シードが販売者、この日の午後 をつけてうづ」『この日の午後の午後、彼女は向でうづ」と、どつ てうづしたのか考えてみよしうづ

*あなたは、なぜこの5つの質問を発見として選んだのか、その理由を書いて下さい。

缶は「缶がが缶、されど缶」であり、いい「アーリー」には「見る何個か」の、多くのメッセージーーーと興奮しているといふことを、最初に「もう見たために」このほうは新聞で開拓をします。登場人物は、階ねえの小豆さんらでありますうつす、登場2はこれにちなんで新聞紙で、自分でよく、それから自分で自分で当たさうらうといふ、興奮したためめめめです。登場3は、缶詰が作られる、マーカや赤茶けをみて、あるいは考へていても、それで、登場4は、新聞記者らもあえこの記者、新聞紙で、『8101年SP2』と序章読んでおられます。めめめ登場5は、漫画3では、運んで入って「立派が弱いので、どうか引けに引けに立派が弱い」立派には立派が弱いといふ民衆で、トリにうつて立派が弱いと見えます。以上が、新聞記者を主ねでです。

*あなたは、この発見により、児童に向に着目してほしいと思いましたか。

赤茶けやマーク、壁紙、横筋的な形に着目してほしいと思いました。隣らの子もスヤウの中に、トキのメッセージをこめたものの中のエコを感じてもらうまいと思きました。そからいろいろ、新聞が発展していく、ビールの製法などにも興味をもつてもらはうまいと思いました。また、ビールだけに限らず、身の周りの商品など、自分が使いこなす耳でいるものにも、同じような発見を見出せたら嬉しいだうだうなどと思いました。

実は、この中に思ったのを今回じっくり見て発見していく結果で、とても楽しくさせてもらいました。最終は、他の商品もじっくり見るよつにはれます。

性を示唆している。

そのなかでとくに感じることは、物そのものについての情報をすべてそのまま来館者に投げ掛けることが解説ではないということである。解説者の役目は、来館者自身が主体的に博物館資料と対峙できるような発問をこころがけ、それをとおして来館者自身が資料そのものの新たな発見へと向かうよう支援することではないだろうか。このような観点から資料分析と来館者への解説を含む訓練として、この課題を設定してみた。

2. 結論

“すべての人にやさしい博物館づくり”ということが、よく言われるが、これが具体的にはどういうことなのか、来館者の視点から具体的に考えていく必要があるのではなかろうか。さらに博物館を利用する団体や学校への対応のシステムは、ほとんどの館で出来上がっているが、しかしその解説等の具体的な実践の中身については十分に論議されてきていないではなかろうか。これからはその質の検討も含めて、またそれに関心をもつて取り組む若い人の育成も重要なになってくると思われるのだが、いかがなものだろうか。

会員からのメッセージ

◆『研究紀要』の編集を終えて

東京大学教育学研究科助教授 鈴木真理

大会の開催、この『会報』の発行と同時に、『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』第3号が刊行されます。「3号まできたか」という、軽い感慨もあります。投稿する方も力を入れて執筆なさっているのでしょうか、毎年、編集委員も忙しい時期に、数回編集委員会を開き、論文査読の宿題を抱えて年を越し、判断に悩むというような「無償の行為」を行っています。さらに、それを支える事務局の方のご苦労も大変なものがあります。

なぜこんな面倒な事を引き受けているのだろうかと思うことがあります。自分の時間を削っているのに、自分にとって読むに値しないと思う論文を読まなければならなかつたり、他人に理解してもらおうとは思っていないのではないかと考えざるを得ないような「論文」にあたることもないわけではありません。しかし、「ミュージアム・マネージメント」という新しい研究領域を開拓していくことの必要性、その領域を深めようとする若い（年齢的な意味だけではないのですが）人たちへの支援の必要性ということを考え、「じゃ、やるしかないか」と気を取り直します。

投稿をする・掲載されることは、会員の権利でしょう。しかし、あり当たりの言い方にしかならないのですが、この領域の研究の発展への貢献という「義務」についても考えてみるとあってもいいと思います。多くの会員が、きちんと一定のルールにしたがつて、わかりやすく、論文の意義を理解してもらえるような、ひとりよがりにならない「論文・実践報告」を投稿し、学会財政の負担があつてもその全てが掲載されるようになるといいと考えます。この際、編集委員会・事務局の負担は考えないことにしましょう。

新しい領域だけに、研究に対するスタンス・研究方法などが標準化されていません。しかし、学会（それも英文名称ではacademy）を名乗っているのですから、会員にはそれが、他の学会などを意識しながら、研究ということのありようについて考えていくことが求められると思います。この学会の設立・存在が、単なるアドバルーンや自己満足の場・別の活動のための利用の場としてのみ意味があるということにならないためにも。

(理事・編集委員)



◆「博物館と学校を結んだ授業」

茨城県結城市立山川小学校長 早瀬長利

本校では、平成9年度より、茨城県自然博物館が実施している「自然博物館を中心とした環境学習ネットワーク推進事業」の研究協力校として「学校と博物館が連携した環境教育の実践的研究」に取り組み、学校の教育活動のどのような分野で、博物館の機能を生かした連携が可能であり、有効であるかについて試行してきた。

その実践の一つとして今回テレビ会議システムを活用して、2年生の生活科の実践的な取り組みを行つたので紹介する。

実施：平成11年2月5日（5校時）

対象：2年生（54名）

単元：生活科：タネであそぼう

（本時は5時間取り扱いの2時間目）

指導者：3名

（本校）T1飯島百代

T2広瀬史子

（茨城県自然博物館）G T桜井稔郎

授業実施までの手順として、本校と博物館による打ち合わせを3回実施し、実施する単元・指導者の決定、指導内容・展開の工夫、準備する資料等をつめていつ

た。今回は2年生の生活科の目標である「自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする」ことに焦点をあてることとして、単元を「タネであそぼう」とし、本校の2年生2クラス（54名）を合同でTT方式の授業を実施することに決定し準備に入った。

前日までに、テレビ会議システムの設置を行い博物館と試験通信をすると同時に、本校教室の準備、博物館で資料の準備、及び授業展開の手順等を細部にわたって相互に確認した。

当日は、博物館と本校を大型スクリーンのテレビ会議システムで結んで3名の指導者により、風で飛ぶタネのモデルを作成しながら遊ぶことのできる活動を通して「植物のタネの不思議」について学習した。児童はこのシステムに強い関心を示し、モデルの作成や飛ばす活動を意欲的に行い、また疑問点などを画像を通して、博物館職員と相互にやりとりするなど新しい試みにきわめて柔軟に対応し活動していた。今後、博物館と学校の連携はますます重要視されてくると思う。博物館職員と教師が積極的に協力し合い、新しい教材の開発や指導法の工夫改善に取り組むことの重要性を再確認した。

● 研究部会の開催予定一覧

- すでに終了したのですが、記録として掲載させていただきます。

研究部会	日 時	テ マ	場 所
理論構築研究部会	2月20日(土) 13:30~16:00	「連携」の第3弾として、野田市郷土博物館の金山喜昭氏より「市民との幅広い連携の在り方 ー博物館の枠組みを考えるー」、福島県立博物館の長島雄一氏より「障害者と博物館ー盲学校の博物館活動を中心としてー」と題してそれぞれご報告いただきました。	国立科学博物館

◆当学会の会員であれば、すべての部会に参加することができます。参加費等は特に必要ありません。

◆参加を希望される方は、別添の事務連絡票などで、学会事務局までお申し込み下さい。

● INFORMATION

● 年報の発行

今年度より年報を発行いたします。今回は、平成8年度から10年度までの本学会の事業をとりまとめました。2部構成になっており、第1部には、過去3回の大会における講演などが総集編のかたちで掲載されています。第2部は、各研究部会の開催状況などを中心としたインデックスになっております。なお、今後は、各研究部会の1年間の活動成果を掲載していくことも視野に入れ、毎年発行していく予定になっております。

● 文部省委嘱事業に関する調査報告書の発行

文部省より委嘱をうけて実施した「成熟社会の博物館利用者サービスの新しい在り方に関する研究開発」について、ミュージアムの利用者サービスの理念を提示し、これからの方を問題提起した『成熟社会のミュージアム像と利用者サービスの基本方向』と、実践的なかたちで利用者サービスの具体的な方法を提案した『成熟社会の利用者サービス実践のための方法』の2つの報告書を発行します。会員の方には無料で配布します。

● 研究紀要第3号の発行

第4回大会にあわせて研究紀要の第3号が発行されます。平成10年度会員の方には無料で1部お配りしてお

ります。それ以上の部数を希望される方や会員外の方には、1部1,500円でお分けしております（送料別）。FAX等で事務局まで申し込んでいただければ、郵便振替の用紙とともに郵送いたします。

● 会費納入のお願い

大会（総会）をもって会計年度が改まりますので、新年度（平成11年度）年会費の納入をお願いします。個人会員6,000円、学生会員3,000円、法人会員50,000円となります。同封の払込用紙をご利用ください。銀行振込を希望される場合や、請求書・領収書が必要な場合は、事務局までご連絡下さい。[注意]会費を3年間滞納されると、当学会会則第7条第2項により、退会されたものとみなされ、会員登録が抹消されます。ご注意ください。

J M M A 会報 No.12 (vol. 3 no.4)

発行日／1999年3月6日

発 行／日本ミュージアム・マネジメント学会

事務局 国立科学博物館教育部企画課

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20

TEL 03-5814-9876 FAX 03-5814-9898

デザイン・印刷・製本／(株)ミユゼ